

『アダム・ビード』に表れたジョージ・エリオットの 倫理的人道主義のヴィジョン

福永 信哲

序

ジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-80) の小説言語に反映した倫理的人道主義の特徴を概観すると、その基本的性格は聖書解釈の視座を転換することにあった。19世紀ヨーロッパの先達がなし遂げ、後世に遺した事業は、端的にいえば、キリスト教世界の究極の文化遺産たる聖書の解釈を、神の啓示として文字通りに捉える読み方から、フォイエルバッハ (Feuerbach, 1804-72) に従えば、「人類の備忘録」(64) として歴史発展の流れの中で捉える読み方へ転換したことである。メアリアン¹ (Mary Anne, later Marian, エリオットの実名) が小説の創作を手掛ける直前の 1855-56 年に、リベラル派の雑誌『ウエストミンスター・レビュー』 (*Westminster Review*) に発表した一連のエッセーを概観すると、そこに彼女が経てきた精神遍歴が浮かび上がってくる。敬虔な禁欲的クリスチャンから穏健で円熟した人道主義者へと変貌を遂げた彼女の道筋が刻印されている。殊に、ジョージ・ヘンリー・ルイス (George Henry Lewes, 1817-78) と駆け落ちしたドイツ滞在の体験は、彼女の脱皮を促す触媒となった。これらのエッセーには、この異文化体験に集約された旺盛な知的活動の成果が見て取れる。これを全体として見ると、彼女の半生の総括であると同時に、きたるべき小説創作のための精神的踏み台となったことが窺える。

I 倫理的人道主義とは何か

メアリアンが試みたあまたのエッセーのうち、彼女の精神遍歴を鮮やかに映し出している 2 篇の批評エッセーがある。そのうちの一つは、福音主義を歴史的な視野から総括した「福音主義の教え：カミング博士」(以下、「福音主義の教え」と略記) (“*Evangelical Teaching: Dr Cumming,*” 1855)² である。これは、メアリアンが福音主義から倫理的人道主義へと至った思想形成を知る上で、欠くことができない一篇である。そこに表れた彼女の宗教観にはドイツ高等批評³ から学んだ見識が生かされている。その要点は、次のように要約できる。聖書解釈の仕方は、時代や文化のあり方によって異なる。なぜなら、解釈の基準は、それぞれの時代や文化の持っている教養の総和にあるからである。聖書は、それほどに人類の発展してゆく思想を包摂するに足る融通無碍な知的財産だということなのだ。異なった時代や文化から謙遜に学ぶことによって、私たちは聖書解釈の幅と奥行を広げることができる (157-58)。そのよい例が、

ヨーロッパ人が古代ギリシャ文明から摂取したヘレニズムの叡知である (147)。私たちの心の中にある神の意識は、超歴史的権威によらず、あらゆる人間的な経験や感情への共感に依っている。このようなイメージの神を仰ぐことは、私たちをより人間的にしてくれる。真に人間的な宗教、すなわち私たちの人格を豊かにしてくれる宗教は、知性と感情のバランスを健全に保つ平衡感覚を持っているという (168-69)。

「福音主義の教え」には、科学と宗教の調和を模索した作家の道筋が読み取れる。科学の照らし出す真理と、聖書の、生きて学ぶ知恵とを和解させようとした問題意識はその中心テーマである。その一節に次のようなものがある。

Fatally powerful as religious systems have been, human nature is stronger and wider than religious systems, and though dogmas may hamper, they cannot absolutely repress its growth: build walls round the living tree¹⁾ as you will, the bricks and mortar have by and by to give way before the slow and sure operation of the sap²⁾. (167-68)

この引用の暗喩には、人間の内的成熟のプロセスを自然の営みの眼で捉える視座の転換 2) が認められる。人間の“nature”は宇宙的な“nature”と有機的につながっている。その成長発展も自然の生々流転の一環なのである。個々の人間は木の葉であり、命の営みの一環としての木は一つの全体である 1)。その全体が、さらに大きな環境との相互依存をなしている。それ故、人間の営みが生命的世界から遠ざかると、感情と行動と言葉も命との交流が希薄になり、内発性を枯渇させる。ここに上部構造としての宗教、道徳が因習化し、言葉が空文化する所以がある。

上記引用に見られるエリオットのロマン派的な感受性は、『アダム・ビード』(Adam Bede, 1859) の作品構想に深く浸透している。アッシュトン (Ashton) によれば、この作品には作家の生まれ育った風土が刻印され、その精神遍歴が多面的に反映している。作品のプロット、登場人物は、メリアンの子ども時代と思春期までの記憶、幅広い読書、知人から直接聞いた逸話を基に再構成したものである。物語に作家自身のあらゆる経験が流れ込んでいる。敬虔な宗教的心情を抱きながら不本意にも懐疑主義に傾いていった経緯、作家自身の家族の愛憎半ばする絆、家族間の気質と価値観の違いによる葛藤、古い土俗的共同体の暮らしの悲喜、地縁・血縁のネットワークから解き放たれた安堵感と喪失感などが混ざり合い、融け合って、一つの物語にあざなわれたという (Ashton 205; Haight 249-50)。

エリオットの過去に向けられた想像力は、その恐るべき記憶力に助けられて、イングランドのありし日の姿を精細に甦らせた。描かれた時代と創作の時代の幅は、1799年から1859年に及ぶほぼ60年の幅があるが、いにしへの時代を振り返る芸術家の魂は、鋭い歴史感覚によって

過去と現在を自在に行き来している。現代が失った伝統を懐かしむ情緒と、その間の文明の進歩で得た俯瞰図で過去の病弊をアイロニカルに眺めるまなざしが相半ばしている。この距離感によって、イングランドで起こった物質的・精神的生活の両面に及ぶ歴史的变化が読者に追体験される所以になっている。

『アダム・ビード』に描かれたイングランドの過去の姿は、読者の心にこだまを呼び起こす力がこもっている。小説ディスコースに芸術的迫真性を添えている秘密は、エリオットの繊細な言語感覚に多くを負っているが、これは、作家が行き着いた自然史の問題意識から編み出した言語意識である。

Nature has her language1), and she is not untruthful; but we don't know all the intricacies of her syntax just yet, and in a hasty reading we may happen to extract the very opposite of her real meaning. (15: 168) ⁵

この一節は、21歳のドニソーン館の御曹司アーサーが17歳の搾乳娘ヘティを美化しがちな傾向を指摘する語りの文脈で起きている。自然に言語が内在する 1) という発想は、エリオットがルイスと共有した自然史のものである。『アダム・ビード』には“nature”という言葉が頻出する。この事実は、作家が“nature”という言葉に、みずからの有機的生命観の鍵を見ていたことを示している。作家のこの問題意識は、作品の構造と言語の根幹にあるものである。それだけに、この言葉が起こる文脈の子細な検討が欠かせない。

『アダム・ビード』のほぼ2年前に書かれた「ドイツ民族の自然史」(“The Natural History of German Life,” 1856)で作家が明らかにした言語観に照らしてみると、“nature”という言葉の意味あいが明らかになる。このエッセーは、メアリアンがそれまでに辿りついた人間観、自然観のエッセンスを凝縮して表現している。彼女の小説構想の哲学的・歴史的背景を知る上で欠かすことのできない批評である。彼女は、ドイツ民族学者リール(Liehl, 1823-97)の民俗学の著書を批評する中で、彼の自然史の見方に共感を寄せている。メアリアンによれば、彼女がとりわけリールに共感を覚えるのは、人間を終始一貫して自然の営みの文脈で捉えているところにある。すなわち、自然を司る命の法則が人間の心身にも働いているという直感的認識が、彼の人間と社会を見る眼の基本にある。個人という生命体からなりたつ共同体もまた生命体なのであって、固有の命の法則で動いているのだ。自然風土の中で培われてきた人間の暮らしもまた、長年の間にその影響を受け、独特の歴史的伝統を形成してきた。従って、民族の歴史的伝統の中にも生命の法則が脈々と流れている。この伝統を最もよく保っているのが農民なのである。彼らは、大地の暮らしの中から自分たちの風俗・習慣と精神文化を築いてきた。彼らの意識では、それ故、大地への愛着と過去の記憶とは不可分一体のものなのだ。過去との連続性の強い愛着の世界でこそ、彼らは内面生活の安定を得てきたのだ。そこには、合理性を重んじ

る都市文化には理解し難い排他性、迷信、偏見、異教的習慣が満ち満ちている。だが、そこに民族の遠い記憶が生きており、これが彼らの情緒的要求を満たしている。生命には生命の論理があり、合理的な発想のみをもってしては汲み取れないものがある。人間を動かす力としての過去には命の神秘が宿っており、これをなおざりにするいかなる合理的な社会改革論も真の妥当性を持ち得ないというのである (275-76)。

以上リールの見解を受けて、エリオットは、彼の言語感覚に歴史的言語の奥深い可能性を見ている。豊かな文化の蓄積を持つ言語は、本来的に、意味の微妙な綾、さらに微妙な連想のこだまを持っている。仮に合理的な理念に立脚した普遍的な言葉を人為的に作ることに成功したとすると、それは曖昧さ、気紛れな慣用句、煩わしい姿・形、色調に富んだ含蓄の突発的な揺らめき、忘れられた歳月を湛えた神々しい古語の靈気を取り去られ、脱臭され、残響のない言葉になるだろう。それは意志疎通の手段として、あるいは、科学を表現する手段としては完璧であろうが、命を表現することはできないと。歴史言語は本質的に曖昧さを宿しており、その曖昧さにこそ音楽、情念、機知、想像力などの生命的な要素が息衝いているという (282-83)。これは、リールとの対話で触発されたメアリアン自身の言語観と察せられる。

興味深いことは、小説創作に乗り出す直前のメアリアンの中で、命の営みを明晰に捉えようとする科学的探究心と、その神秘にたいする敬虔さが葛藤していることである。自然に内在する法則を科学の言葉で解明する澄明さと、人間の不条理を曖昧なままに描こうとする芸術的想像力がせめぎ合っているのである。この矛盾・葛藤は、最後の小説『ダニエル・デロンダ』(*Daniel Deronda*, 1876) に至るまで、彼女の小説言語の端々に顔を覗かせている。非合理的存在としての人の命の悲喜を、歴史的共同体を背景に置いて描き出すことが、『アダム・ビード』で作家が試みた挑戦である。過去を背負いつつ隣人と関わり合うことを宿命づけられた個人は、生の根源的衝動を満たしつつ、社会規範の要請に従わなくてはならない。この相矛盾する要求を和解させつつ、いかに個人としての生を充足させるか、これは、作家がこの作品で問うた普遍的な問題である。

II 『アダム・ビード』にみる自然史のヴィジョン

『アダム・ビード』のバラード的なテーマを象徴する地主の嫡子アーサーと小作人の娘ヘティの情事は、この物語の核心的なプロットである。この主題と交差するように、大エアダムのヘティに対する純愛がラブ・トライアングルをなしている。この三角関係に、メソディズム⁶の純粋な信仰の人ダイナと、伝統的キリスト教体制の束ね役たる国教会牧師アーウィンが絡まり合って、作家の非ドグマ的宗教の境地が、古い田園共同体を背景に位置づけられている。

以下、エリオットの倫理的人道主義とその言語観が『アダム・ビード』に反映しているさまを、作品ディスコースから具体的に検討してみたい。そこに作家の精神遍歴の一端が浮かび上がってくるからである。

It was a wood of beeches and limes, with here and there a light, silver-stemmed birch — just the sort of wood most haunted by the nymphs1): you see their white sunlit limbs gleaming athwart the boughs, or peeping from behind the smooth-sweeping outline of a tall lime; you hear their soft liquid laughter2)— but if you look with a too curious sacrilegious eye, they vanish behind the silvery beeches, they make you believe that their voice was only a running brooklet3), perhaps they metamorphose themselves into a tawny squirrel that scampers away and mocks you4) from the topmost bough. (12: 141)

この一節は、アーサーが館の領地の森でヘティと密会する場面を描いている。自分では取るに足りない気の迷いと思っている衝動が思いがけず込み上げて、彼女との逢瀬を図ったのである。逢引の舞台となる森の情景は、印象画のような暗示性に満ちている。ブナとシナノキの巨木の作り出す鬱蒼たる原初の空間に、白樺の樹皮の白銀色が陽光に映えている。作家の詩的想像力は、この原始空間にギリシャ神話の精霊ニンフ 1) を連想している。いたずら好きの妖精たちの「微かに水の流れるような笑いさざめき」2) は、木の葉のざわめきを暗示しているようにも見えるが、すぐ次にくる「小川のせせらぎ」3) をも偲ばせる。あるいは栗鼠の敏捷な木登りの動き 4) をも想像させる。古代人は、森の旺盛な命の営みの中に、自然宗教に固有の多神教的な想像力を巡らせてきた。これは、キリスト教の啓蒙の光が森に差しこむ以前の時代の想像力である。ところが現実には、森の原初的な空間の記憶は現代人の心の基層にも生き続けている。文化人類学の知見を身に付けていたエリオットは、人間が森のただ中に身を置くと、その圧倒的な影響を受け、生の根源的な衝動に立ち返る真実を知っていた。これをギリシャ神話のイメージを用いて表現することは、彼女にとって自然な文体上の選択だったことであろう。青春の上げ潮のなせる原始的情念を描くのに、巨木の作り出す空間の官能性を喚起することは、作家の歴史言語に対する鋭い直観から生まれた文体感覚である。

森の原初的な空間が人間にどのような感化を及ぼすかを偲ばせる描写が、この場面が続くアーサーとヘティの触れ合いに見られる。

Love is such a simple thing1) when we have only one-and-twenty summers and a sweet girl of seventeen trembles under our glance, as if she were a bud first opening her heart with wondering rapture2) to the morning. Such young unfurrowed souls roll3) to meet each other like two velvet peaches4) that touch softly and are at rest; they minge as easily as two brooklets5) that ask for nothing but to entwine themselves and ripple with ever-interlacing curves in the leafiest hiding-places. (12: 144)

ここに見られる若い男女の情事描写にも作家の文化人類学的な直観が窺える。エロスの感覚美は、当事者にとっても驚くべき命の上げ潮である。不可思議な自然の力が訪れるとき、慣習的な世界で培った常識と自己抑制はいとも容易に運び去られてしまう。自然の有機的暗喩 (organic metaphor) は多元的な暗示性に富んでいる。小川の流れが合流するイメージ 5) は、男と女の感情の流れが原初空間で一つに溶け合うさまを鮮やかに捉えている。たとえば朝顔や桃のイメージ 2) は、女性のエロスを喚起する強力なシンボルである。「蕾のままの魂」3) には、自分に何が起きているのか知らぬままに喜悦に身を委ねる感覚体験 2) が連想される。桃の色香と感触 4) も女性の官能性を暗示させて効果的である。「愛はかくまでに単純なこと」1) という表現は、世間の慣習に縛られた当事者の思いが刹那の感覚美で押し流される動きを捉えて、心理的な陰影を湛えている。この感情描写は、イメージ言語の暗示的な言い回しで、男女に生の根源的な営みが起こったことを示唆して、物語の悲劇的な展開を予想させる。

森の密やかな空間で一時の逢瀬を楽しむアーサーとヘティの行為を、語り手が俯瞰図的なまなざしで、その意味あいを暗示している一節がある。

It was a still afternoon — the golden light was lingering languidly among the upper boughs, only glancing down here and there on the purple pathway and its edge of faintly sprinkled moss: an afternoon in which destiny disguises her cold awful face behind a hazy radiant veil, encloses us in warm downy wings, and poisons us with violet-scented breath. (12: 141-42)

この一節には作家自身の悲劇的ヴィジョンが予示されている。この世に因果応報の道理が生きていることを喝破したシェイクスピアの台詞 “The gods are just, and of our pleasant vices / Make instrument to plague us:” (*King Lear*; 5.3.170-71) が連想される。夕刻の木漏れ日がかこかしこに黄金色の陽溜りを作り、苔の緑の絨毯を照らし出す非日常的空間は、男女を刹那の衝動に突き動かす自然力である。不可抗力とも見える力が未経験の若者を駆り立てて、人生の見掛けと実態の落差を見誤らせるイメージ描写には、人間の業に対する悲劇作家の諦念と、悲しみへの共感がある。

エリオットは、持ち前の純な魂と情熱ゆえに、数々の恋愛体験を積んでいた。それ故、みずからの愛欲の根深さをしみじみと悟った人の慚愧の念があった。痛切な体験が基盤となって、エロスの燃焼が命の充足にいかばかり貢献し得るか、同時に、色恋の情念がいかにか人に人を迷わせ、苦しめるかを皮膚感覚で知っていた。こうした迷いの自覚が、ヘレニズムの多神教の清濁併せ呑む想像力、とりわけギリシャ神話のイメージ言語、をわが糧とする動機となっている。古代宗教に広く見られる多神教の大らかで雄渾な発想と寓意は、後代にもお伽噺や詩の中にひっそり生き延びた。エリオットは、エロスの人間体験を赤裸々に表現することに言葉の力が宿ると

は考えなかった。むしろ、曖昧なものをそのままに暗示する詩的言語に、人間感情の複雑な様相を表現する可能性を見た。これも、業の深い人間の迷いと苦しみに心底からの共感を寄せ、犯した罪の贖いを信じる倫理的な人道主義の人間の素地となっている。

一方、作家自身の感受性を仮託されたアダムは、アーサーとヘティの秘めた情事に気付かないままに、彼女に恋心を抱き続け、結婚まで考えていた。それだけに、彼が二人の秘め事を知った折、恋の悶着がもたらす心の嵐が訪れた。しかし、事実のすべてを知っている訳ではない彼は、地主の地位を約束されたアーサーの申し開きと、以後ヘティとの関係を断つ旨の誓約を信じ、心の整理を付けて、彼女との愛を育むことに将来への希望を見出した。この間、情事の結果として、ヘティの胎内には命が兆しつつあった。妊娠の可能性には思いも及ばないアダムは、状況を楽観的に考えていたのである。廉直な彼は、おのれの純な恋心が相手の成熟を促し、結婚の絆を強めるものと信じたのである。

このような心境にあるアダムの一途な恋心には、相手の人間的な内実に対する読みは希薄である。こういう朴訥な情念を、語り手は次のように語る。

Is it any weakness, pray, to be wrought on by exquisite music? — to feel its wondrous harmonies searching the subtlest windings of your soul, the delicate fibres of life¹⁾ where no memory can penetrate²⁾, and binding together your whole being past and present in one unspeakable vibration: melting you in one moment³⁾ with all the tenderness, all the love that has been scattered through the toilsome years, concentrating in one emotion of heroic courage or resignation⁴⁾ all the hard-learned lessons of self-renouncing sympathy, blending your present joy with past sorrow, and your present sorrow with all your past joy⁵⁾. . . For the beauty of a lovely woman is like music⁶⁾: what can one say more? Beauty has an expression beyond and far above the one woman's soul that it clothes, as the words of genius have a wider meaning than the thought that prompted them⁷⁾: it is more than a woman's love that moves us in a woman's eyes — it seems to be a far-off mighty love⁸⁾ that has come near to us, and made speech for itself there; (33: 384-85)

恋するということがどういう感情なのか、それがどのような心理的ドラマを呼び起こすのか、愛を覚えた人の中に眠っている潜在的な力をいかに引き出し、その体験がいかに人間的成熟に誘（いざな）う影響力となるのか、これら当人にも知られぬ神秘的働きがこの一節に直観されている。よし恋が盲目であっても、愛する人には相手の人間的な真実を超えて、自己を超えた世界に招き入れ、命の充足の境地へと導いてくれる。この感情体験を通して、感動、忘我、共感、葛藤、幻滅、忍耐などなど、多様な感情練磨の鍛冶場が恋愛体験にはある。

この引用文には、少なからぬ男性を愛した作家ならではの体験的眞実が感じられる。心身もろとも体験で掴みとった眞正の境地からほとぼしり出る言葉には、散文よりも詩がふさわしい。恋心の機微の描写に音楽の直喩が用いられているのは示唆的である。感情のうねりが液体の動きのように描かれている³⁾。これは、たとえばバイオリンの奏者が、肉体の延長としての楽器を操って心身のうねりを弦の震えに託す (delicate fibres of life¹⁾ , vibration melting you in one moment³⁾ 境地を想起させる。こうして、泉から湧き上がる水のように、人がいずとも知れぬ源流から流れ出る (where no memory can penetrate²⁾) 感情に身を任せるとき、人は大いなる働きの前になす術を知らぬ。感受性は研ぎ澄まされ、心の眼に過去と現在のあらゆる風景が一瞬のうちに合流してくる (self-renouncing sympathy, blending your present joy with past sorrow, and your present sorrow with all your past joy⁵⁾)。感情のカタルシスが起きるとき、自分の過去と現在が一望のもとに見渡せる。これが触媒となって、行動へ踏み出すエネルギーを賜る (concentrating in one emotion of heroic courage or resignation⁴⁾) のである。

「一人の美貌の女性は音楽のようなもの」⁶⁾ と語り手が表現するとき、彼女は、ミロのヴィーナスないしはモナ・リザに類する不朽の女性美 (a far-off mighty love⁸⁾) を想起していることが察せられる。これもまた、作家の多神教的な想像力の産物である。遠い過去から現在へと伝承されてきた女性美のなまめかしさは神話化され、これに触れる男性に、一人の女性を超えた多元的な解釈と夢をもたらす。この背後に、自然史の見方が隠れている。女性の官能美は、当人の思いを遥かに超えた自然の働きの粹である。春に若葉が鮮やかな新緑を芽吹く創造の力とは同源の働きである。この驚異的な力が働いてこそ、人の類としての生き残りが保障される。当の女性が道徳的資質に優れていようといまいと、自然にとっては小さなことなのである。個々の生命が繁殖の季節を迎えたとき、多様な戦略を用意する。そこに異性選択上の駆け引きがあり、陶醉による美化が起こる。これは、闇を手探りして意味を探り取るほかにはない人間の悲劇的宿命であると、エリオットは見る。『ミドルマーチ』(Middlemarch, 1871-72) と『ダニエル・デロンダ』で、作家は結婚の伴侶を見つけようと策を弄する人物に関して、異性選択の駆け引きと闘争のイメージを多用しているが、『アダム・ビード』にもその萌芽が見て取れる。そこに生存競争の悲喜劇を見る⁷⁾ ことにおいては、チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin, 1809-82) と基盤を同じくしている。

女性の仕草、とりわけ眼の表情に豊かな官能美があり、これを見る男の人間性の鏡にいかようにも映るさま⁷⁾ をラング (共同体の言語活動を支える慣習・規則の体系としての言語) とパロール (ラングに依拠しながら、個人が個別の場面で行使する発話行為) の関係に見ている。「天才が発する言葉は、それを触発した個別の場面での思いそのものよりも幅広い意味を湛えている」⁷⁾ という。⁸⁾ これは、美貌の女性という生きたテキストを男が読むとき、連綿と継承されてきた連想のプリズムを通すことによって、相手の現実を踏み越えて意味解釈をする人間

の性を言い当てている。知ることに限りある個人が、単一の視点から相手のあるがままの姿を、限られた時間で見通すことは難しいからである。

カロール (Carroll) によれば、「人生は、成長・発展する自己がより広範な意味あいを模索し、創造し続ける過程であり、これによって意味の全体像を発見する喜びと、失意の渇きが交互にやってくる営みであり、魂を練磨する谷間である。主要人物のこのような意味探求の営みは、エリオット自身の精神遍歴に由来する」という (3)。アダムの自己発見のテーマにも同じ意味探求の試みが描かれている。これは、テキストの言語事実を吟味すると見えてくる。アーマース (Ermarth) は、カロールの展開した、エリオットにおける意味探求のテーマ⁹を受け継ぎ、さらに掘り下げている。彼女によれば、人は人生という闇を手探りし、意味を発見するプロセスで、複雑曖昧な現実を整理するための「引き出し」を用いているという。彼女は、この「引き出し」を「分かりやすさのシステム」ないしは「個人の文法システム」と呼ぶ。人間関係の網の目に置かれた個々のシステムは出会い、時に衝突し、時に和解し、そのダイナミズムによって不断に新しい現実が構築されてゆくという。『ミドルマーチ』では、多様な「分かりやすさのシステム」の出会いと葛藤が、共同体という生き物を動かす原動力になっている。個々人の「分かりやすさのシステム」は文字通り「分かりやすさ」の一貫性を貫こうとするが、これが異質なシステムと遭遇し、試されるパターンがある。これによって異質なものがぶつかり、渦を巻く構図の中で、人は「沈黙の向こう側に響いている轟音」¹⁰を聞かされる。「分かりやすい」ままであるために構築したシステムは、これを排除しようとするが、命の神秘の世界から響いてくるこの「雑音」は決して沈黙させられないという (124)。正統派キリスト教の教義に背を向けつつ、なお聖書とギリシャ悲劇と神話に伝承された体験的真実を掬い取ろうとした作家の根本姿勢は、アーマースが洞察したように、意味の全体像に肉薄しようとする暗中模索に由来する。その根本姿勢がすでに『アダム・ビード』に萌芽していることが分かる。

III 迷いと苦しみを免れぬ人間への共感としての宗教

アーサーとヘティの密やかな逢瀬のあった翌年 1800 年 2 月、冬枯れの田園は春の息吹が予感される頃であった。ヘティは、ホール農場の女あるじ・ポイザー夫人にせかされて、アダムとの結婚準備のために、買い出しに出向く折であった。語り手は、ヘティの胎内に宿った命の成長とは裏腹な苦悩を、人間苦の究極のシンボルであるイエスの十字架像に言寄せて暗示している。ヨーロッパ大陸（この場面を執筆中、エリオットはドイツ滞在中であった）を散策すると、美しい田園風景のただ中に十字架の苦悩の像（“the agony of the Cross”）に出会うという。土地の歴史を知らない旅人がこの光景に触れれば、春の喜びを予感させる風景とは不調和なシンボルを訝しく思うことだろう、と語る。

He [a traveler] would not know that hidden behind the apple-blossoms, or among the

golden corn, or under the shrouding boughs of the wood, there might be a human heart beating heavily with anguish¹⁾; perhaps a young blooming girl, not knowing where to turn for refuge from swift-advancing shame; understanding no more of this life of ours than a foolish lost lamb wandering farther and farther in the nightfall on the lonely heath; yet tasting the bitterest of life's bitterness. (35: 395)

エリオットは、人物の内的状況を描くのに、暗喩や寓意を用いる技を、小説執筆を手掛けた当初から自己のものにしていた。これらが、歴史言語の重層的な意味の奥行を内面描写に生かす手段として効果的なことを直観していたからであろう。この一節にも彼女の文化人類学的な想像力が働いている。季節の巡りのもたらす豊かな恵みのただ中に、イエスの磔刑のシンボルたる十字架があることに、作家が感銘を受けたことが推察される。この印象が、自然の申し子としての肉なる人間の悲劇的な業を想起させたと察せられる。

“a human heart beating heavily with anguish”¹⁾ という言い回しには、心の苦しみと心臓の鼓動を不可分一体のものとする認識がある。ここに、仏教に通じる心身一如の発想を認めることができる。胎内に命を宿す女性の生物的特性が命の充足をもたらしても、同時に深い苦悩を背負わせる所以にもなる。ひとたび共同体の規範がタブーとする行為があったとき、命を育む自然の働きそのものが不名誉の烙印を押され、村八分の恐怖から逃れる術を失う。ここに、人間の生の衝動そのものに悲劇をみたシェイクスピアの名句 “The heart-ache and the thousand natural shocks / That flesh is heir to,” (*Hamlet* 3. 1. 7-8) が想起される。「肉なる人間が背負った心痛とあまたの宿命的な苦しみ」は、女性の固有性ゆえに一層逃れがたいものとなる。命を育む天賦の働きを賜りながら、もの見掛けに幻惑され、宿った命をみずからの手で断つほどの奈落の淵へと追い込まれてゆく女性の宿命的な苦しみが、ここに浮き彫りになっている。女性が知恵の光となる教育機会を与えられず、女性的特性ゆえに罪を背負い、ひいては家父長的権威主義の犠牲になる歴史的パターンは、「ジャネットの悔悟」 (“Janet’s Repentance”) のジャネットから始まって、マギー、ロモラ、グウェンドレンへと連綿とつながる作家の核心的なテーマである。ヘティはこの意味で、エロスの豊かな人間的可能性とは裏腹な悲しみのシンボルであり、罪を犯さずには生きてゆけない人間の業を象徴している。そこに作家の、赦しと慈しみの宗教の契機が宿っている。

上記引用の直後に、作家の倫理的な人道主義からほとぼりした感慨が、語り手の視点から語られる。

Such things [symbols of human frailty and sufferings] are sometimes hidden among the sunny fields and behind the blossoming orchards; and the sound of the gurgling brook, if you came close to one spot behind a small bush, would be mingled for your ear with a

despairing human sob. No wonder man's religion has much sorrow in it1): no wonder he needs a suffering God2). (35: 395)

ここにも、古今変わらぬ人間の宿命的な苦しみに心底から共感を寄せる作家の声が聞こえてくる。自然の営み自体の中に肉の苦しみと死が宿っていると見る 1) 自然史家のまなざしがある。

「人は悲しむ神を必要とする」2) とは、肉なる人間の苦しみを憐れむことが神の愛の最良の表現である、と見る作家の声が響いている。ここに、人間の苦しみを、慈しみをもって描くことこそが作家の使命と感じたエリオットの信念が披瀝されている。

エリオットの聖書解釈に影響を与えた先達として、フォイエルバッハを忘れる訳にはゆかない。エリオットと彼が共通の基盤とするのは、現し身たる存在の苦しみと迷いを免れない人間を赦し、共感を抱く存在としての神という基本概念である。フォイエルバッハは言う。

The blood of Christ cleanses us from our sins in the eyes of God; it is only his human blood that makes God merciful, allays his anger; that is our sins are forgiven us because we are no abstract beings, but creatures of flesh and blood1). (49)

イエスが流した血潮のシンボリズムは、現し身の人間への赦しと共感であるという。迷い多く、弱い「この私」をすべて見抜いて、これをさながらに受け入れ、共感の涙を流す、これが神の慈悲である。肉をまとった神が、肉なる人間の罪を背負い、赦したのである。愛なる神は観念的な品行方正を否定し、肉の感覚美を赦しによって肯定する 1) という。ここにフォイエルバッハとエリオットの琴瑟相和す魂の叫びがある。

* 本稿は日本ジョージ・エリオット協会第 19 回大会シンポジウム（2015 年 11 月 28 日 桜美林大学町田キャンパス）で行った発表を修正・加筆したものである。

注

1. 作家の呼び名は、小説執筆を始めて以後はジョージ・エリオットと呼び、批評活動以前の場合は、本名のメアリアンを用いる。
2. 以後、エリオットの批評エッセーからの引用は *Selected Critical Writings* による。
3. シュトラウス (Strauss, 1808-74) とフォイエルバッハに代表される、ドイツ・ロマンティシズムの流れを汲む聖書の歴史主義的批評運動。
4. 引用文の、片括弧の番号を施した下線部に対応する本文中の番号は、言葉の文脈を明らかにするためのものである。以下、同じ。

5. 出典は、2016年現在の最新ペンギン版による。引用にはページ数の前に章を示す数字を付している。
6. ウェズリー（ジョン、チャールズ）（John, Charles Wesley）兄弟の指導の下で開始されたイギリスにおける信仰復活運動。兄のジョンは英国国教会の聖職者で、霊的に沈滞していた教会の信仰覚醒のために、説教を通じた伝道活動を展開した。ジョンの死後、1895年に国教会から独立した。『岩波キリスト教辞典』参照。
7. . . . each at some period of its life, during some season of the year, during each generation or at intervals, has to struggle for life and to suffer great destruction. When we reflect on this struggle, we may console ourselves with the full belief that the war of nature is not incessant, that no fear is felt, that death is generally prompt, and that **the vigorous, the healthy, and the happy survive and multiply**. (*The Origin of Species* 106)（太字部は本文で言及された箇所を示している。以下、同じ）
8. アーマースは、言語がものの呼び名の寄せ集めではなく、言語的、文化的文脈に置かれて内的な意味を帯びる、関係性と価値のシステムであると捉える点で、エリオットの言語観はソシュール（Saussure, 1857-1913）のそれに通じているという（119）。
9. カロルは、登場人物が生きる意味を模索するテーマを、聖書解釈学になぞらえて「解釈学」（“hermeneutics”）（3）と呼んでいる。
10. The element of tragedy which lies in the very fact of frequency, has not yet wrought itself into the coarse emotion of mankind; and perhaps our frames could hardly bear much of it. If we had a keen vision and feeling of all ordinary human life, it would be like hearing the grass grow and the squirrel’s heart beat, and we should die of **that roar which lies on the other side of silence**. As it is, the quickest of us walk about wadded with stupidity. (*Middlemarch* 20: 194)

Works Cited

- Ashton, Rosemary. *George Eliot: A Life*. St. Ives: Penguin Books, 1997.
- Carroll, David. *George Eliot and the Conflict of Interpretations: A Reading of the Novels*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Darwin, Charles. *The Origin of Species: By Means of Natural Selection or the Preservation of Favored Races in the Struggle for Life*. New York: Modern Library, 1993.
- Eliot, George. “Evangelical Teaching: Dr Cumming.” *Selected Critical Writings*. Ed. Rosemary Ashton. Oxford: Oxford UP, 1992. 138-70.
- . “The Natural History of German Life”. *Ibid.* 260-95.

- . *Scenes of Clerical Life* (“The Sad Fortunes of Reverend Amos Barton,” “Mr Gilfil’s Love-Story,” “Janet’s Repentance”). Ed. Jennifer Gribble. London: Penguin Classics, 1998.
- . *Adam Bede*. Ed. and introd. Margaret Reynolds. London: Penguin Classics, 2008.
- . *Middlemarch*. Ed. and introd. Rosemary Ashton. London: Penguin Books, 1994.
- . *Daniel Deronda*. Ed. and Introd. Terence Cave. London: Penguin Books, 2003.
- Ermarth, Elizabeth Deeds. “Negotiating *Middlemarch*.” 107-32. Karen Chase. Ed. *Middlemarch in the Twenty-First Century*. Oxford: Oxford UP, 2006.
- Feuerbach, Ludwig. *The Essence of Christianity*. Trans. George Eliot. Prometheus Books, 1989.
- Haight, Gordon. S. *George Eliot: A Biography*. Oxford: Oxford UP, 1978.
- Shakespeare, William. *Hamlet*. Notes. Yasunari Takahashi and Shoichiro Kawai. Tokyo: Taishukan, 2001.
- . *King Lear*. Intro. and notes. Peter Milward. Tokyo: Taishukan, 1987.
- 大貫隆他 『岩波キリスト教辞典』 岩波書店、2002年。